

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 アカガレイ

学名 *Hippoglossoides dubius*

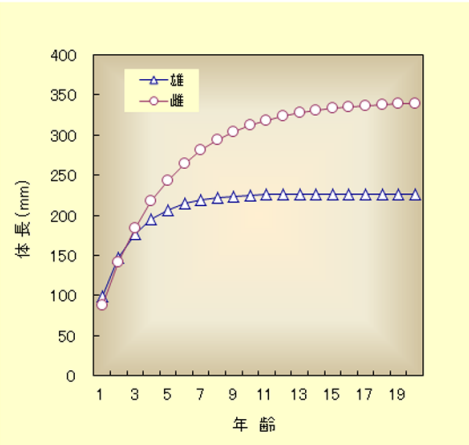
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 20歳
成熟開始年齢： 50%成熟体長は雌25cm、雄17cm（京都府沖での調査による）
産卵期・産卵場： 2～4月・若狭湾、経ヶ岬周辺、赤崎沖を中心とする隠岐諸島周辺および粟島北方（水深180～200m）
索餌期・索餌場： 周年、青森県～島根県の沖合（水深150～900m）
食性： クモヒトデ類を周年捕食するが、オキアミ類やホタルイカモドキ類などのマイクロネクトンが増えると、それらを選択的に捕食
捕食者： マダラが幼稚魚を捕食していることがあるが、成魚の捕食者は不明

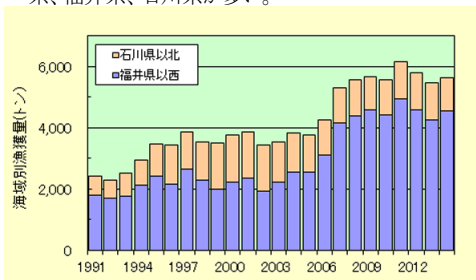


漁業の特徴

アカガレイは、ズワイガニ、ハタハタと並ぶ日本海の底びき網漁業の最重要資源であり、本資源の9割以上が沖合底びき網(1そうびき、2そうびき)と小型底びき網で漁獲され、他には僅かに刺網で漁獲される。沖合底びき網の1そうびき(沖底(1そうびき))が全体の4～6割を占める。

漁獲の動向

漁獲量は、1992年の2,281トンで最低とし、1995～2005年は3,500トン前後、2008年以降は5,500トン前後で推移しており、2014年は5,637トンであった。海域別では石川以北に比べ福井以西の漁獲が多く、府県別では鳥取県、兵庫県、福井県、石川県が多い。

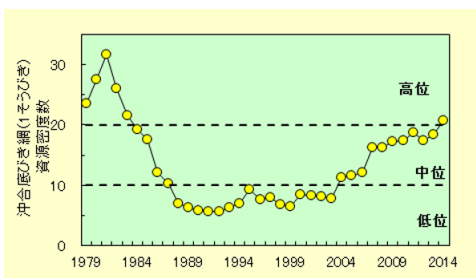
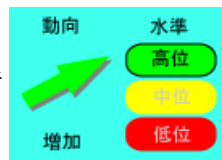


資源評価法

日本海全域における沖底(1そうびき)の漁獲成績報告書から求めた資源密度指数から資源状態を判断した。また、新規加入量調査(石川県、京都府および兵庫県)から加入状況を推察した。

資源状態

沖底(1そうびき)の資源密度指数は、1981年をピークに減少し、10を下回る年が続いたが、2004年以降は増加傾向にあり、2014年の値は20.8となった。資源水準は、1979～2014年の最高値30を三等分し、10を低位と中位の境界、20を中位と高位の境界とし、高位と判断した。直近5年(2010～2014年)の資源密度指数の推移から、動向は増加と判断した。新規加入量調査から、2013年以降の加入量(2歳魚)が極めて少ないことが示唆される。



管理方策

資源水準は高位、動向は増加ではあるが、本種は長寿命であるとともに、2013年以降の新規加入量が極めて少ないことから、小型魚を保護する機能を備えた改良網を使用するなどして過度に漁獲が高まることのないよう配慮するべきである。2016年ABCは、資源状態に合わせて漁獲することを管理目標として算出した。

管理基準	Limit/Target	F値	漁獲割合 (%)	2016年ABC (百トン)
1.0・C2014・1.09	Limit	-	-	61
	Target	-	-	49

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量。 $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- ABC算定規則2-1)に基づき、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した
- δ_1 は高位水準での推奨値1.0を用いた
- Ctは2014年の漁獲量である
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは標準値の1.0、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2012～2014年))である
- ABCは十トンの位を四捨五入した

資源評価のまとめ

- 沖底(1そうびき)の資源密度指数から資源状態を判断した
- 資源水準は高位、動向は増加
- 新規加入量(2歳魚)は2013年以降極めて少ない

管理方策のまとめ

- 2016年ABCは、資源状態に合わせて漁獲することを管理目標として算出した
- 過度に漁獲が高まることのないよう配慮し、資源の有効利用を図るべき
- スワイガンと小型カレイ類を保護する機能を備えた改良網の普及・使用を継続的に促進すべき
- 平成14年からの「資源回復計画」に引き続き、平成24年からは「資源管理指針・計画」を実施中

執筆者: 藤原邦浩・上田祐司

資源評価は毎年更新されます。